

2025年5月ハイパーカレンダーレポート

気づけば初夏の陽射しがまぶしい季節となった。世界を見渡せば、米国で最も注目されていた動きの一つに、イーロン・マスクの「DOGE 離脱」がある。彼が長年にわたり推してきた Dogecoin（ドージコイン）との関係を突然断ち、AI 通貨「xAI Coin」構想に軸足を移したことは、暗号資産界だけでなく、AI と金融の融合を模索するシリコンバレーの勢力圏にも大きな揺れをもたらしている。その背景には、OpenAI や Anthropic との距離感の変化、そして「AGI の時代には通貨も再設計されるべきだ」というマスク独自の哲学があるようだ。新しい通貨概念と AI の関係性において、中央集権／分散型といったこれまでの二項対立を超えるフェーズに入ったとも言える。

さて、ハイパーネットワーク社会研究所でも、4月にスタートした新年度のリズムが少しずつ整い始めた。5月は、複数の新規事業企画が動き出し、構想のブラッシュアップや、補助金申請・提案書作成に追われる日々が続いた。なかには、提案競争で惜しくも敗れた案件もあるが、それも含めて「勝ったり負けたり」が企画のリアルである。むしろ、実際に動き出した人、動かしたチームの中に、すでに次の挑戦が芽生えている。そして月末には、年に一度の評議員会が開催され、組織としての意思決定の場が整った。これをもって、ようやく「本当の意味での新年度」が始まったとも言える。6月からは、いよいよ海外展開事業の調査や、AI 人材育成関連のプロジェクトが本格始動する。

日本国内では、5月も引き続き「生成 AI と教育現場」の話題が尽きなかった。文部科学省が新たに発表した「学校現場における生成 AI 活用指針」案は、実験的な試みにとどまらず、評価やカリキュラム設計にまで踏み込む内容となっており、社会的にも賛否両論を呼んでいる。大分県では、生成 AI を教育現場へ本格導入する動きが加速。例えば、「AI コードエディタ CURSOR は文書作成にも有用」という、教員の教材や報告書作成における AI 支援の現場活用を紹介。また ICT 教育サポーター育成プラットフォームが4年目を迎えて「[教育 DX プラットフォーム](#)」と名称を代えて始動！定例の研修では生成 AI が教員同士のナレッジ共有や教材アイデア出しに役立つことを確認。さらに「Napkin AI × PowerPoint 連携で教材作成が変わる！」も話題に。Napkin AI による図解生成が直接編集可能な PPTX 形式で出力できるようになり、授業準備時間の短縮と質の向上を両立できる実践ツールとして注目。教育×AI は、ハイパー研にとって新年度事業の重要柱の一つ。授業支援や先生向け研修等、ほぼ週1回の学校訪問の充実。引き続き、地域や国際社会における「生成 AI との共生のかたち」を模索し続けていきたい。



※文章を Stable Diffusion で生成

(文責：青木栄二)